



旅と戦争

｜鹿児島県レクリエーション協会 会長 / (株)グローバル 顧問｜

古木 圭介

私の家業は旅行業である。

今年で創立 60 周年を迎え本年 4 月 19 日に東京のサントリーホールを貸切り記念のコンサートを開催した。

多くの聴衆は今までに我が社の旅に参加されたお客様や各国の大使、領事、航空会社の方々、JR や交通関係者など 1,800 人あまり集まっていた。

我が社の生い立ちについては 2025 年の会報第 64 巻第 8 号で書かせていただいたので省略するが、兄弟 3 人で創業し、旅を楽しみながら数々の困難も乗り越えてきた。

最近、兄弟たちも第一線を退き次世代へのバトンタッチが進んでいる。

この 60 年間を振り返り一言でいうと「楽しかった」と言ってよいと思う。

しかしながら、今までに世界情勢に振り回され厳しさを乗り越えてきたことも沢山あった。

この数年もロシアのウクライナ侵攻に始まり、今年は米国が突然にイランを攻撃し世界は困難な時代に突入した。

第三次石油ショックとも言われるくらい日本経済に与える影響は甚大である。もちろん医療業界にも大きな影響が出ていることは連日のように報道されている。

一方では、日本経済を支える柱として 10 年あまり前から政府が力を入れているインバウンド（訪日外国人の旅）は毎年伸びている。

2025 年の実績では訪日外国人 4,268 万人、消費金額 9.5 兆円となった。

一人当たりの消費金額も 22 万円を超えて

いる。

高市総理大臣の台湾有事発言で中国人観光客は激減したが、欧米豪やアジアの富裕層の訪日が増えているので観光収入は順調に伸びている。

しかし中東などで起こっている戦争や紛争が長引けば経済成長に不安が出るだろう。

今回は私が体験したことを記してみたいと思う。

キプロス戦争に遭遇

1974 年夏、我が社は「夏のヨーロッパ 30 日間」を実施した。

西ヨーロッパ諸国と当時は珍しく東ヨーロッパ 2 ケ国を含むバスの旅だった。

参加者は 45 名、添乗員は私と社員 1 名。

旅は順調に進み北部イタリアから東欧のユーゴスラビア（当時）に入国した。

ユーゴスラビアと言う国は今はない。

ご存知の方も多いと思うが、1991 年 6 月に起こった民族間の紛争により 7 ケ国と 1 自治州に分裂してしまった。

その首都ベオグラートに到着。この国は当時、社会主義国家体制で第二次大戦後チトー大統領による支配が続いていた。

入国検査も非常に厳しく行われた。

一方では国民はチトー政権に不満を募らせていた時代でもあった。

国民は西側諸国の自由に憧れていたことも確かだ。

そんな中での観光だから印象に残っているのはチトー大統領に所縁の地巡りくらいである。

そこからバスで次の訪問国ブルガリアに向かった。

ベオグラートからブリガリアの首都ソフィアまで約 400 k m である。高速道路も整っていないので朝出発して午後 3 時ごろに着く予定だったが国境で厳しい検査が待っており、全員バスから降ろされ入国検査を受けるのだが、バスの車体の底まで入念に調べていた。

社会主義国は国境検問が厳しいし、時間もかかり緊張もする。

やっと夕方ソフィアのホテルに到着した。

そこからは国が派遣した警備員（監視役）が滞在中同行することになっている。問題行動を起こさない限り心配はいらぬが気になる存在だった。

夕食を終え、ホテルのバーで飲んでいると、テレビが盛んに戦争らしき報道を始めた。

英語の分かるホテルのマネージャーに訳してもらったところ、トルコとギリシャの戦争が始まったとのことだ。

我々は翌日、空路でトルコのイスタンブールに向かうことになっている。

報道ではイスタンブールの空港は閉鎖らしい。戦争だから当然だろうが 45 名もの旅行者を引き連れる私としては大きなトラブルである。

ホテルからは国際電話は出来ないという。

国際電話をかけるなら中央郵便局に行つてかけろと言うが夜は開いていない。

翌朝、団員たちはアシスタントの社員に任せて、私は早速郵便局へ行きスイスの旅行会社とスイス航空に電話をすることにした。電話をかけるのも簡単ではない。まず申込書に相手の電話番号を記入し、受付窓口提出する。

待合室で 30 分ほど待たされてやっと通話できた。

とにかく西側に脱出しなくてはならない

のでスイス航空に救援を求めた。

するとスイス航空はソフィアには飛んでいないので、どうにかしてベオグラートまで移動してほしい、とのこと。

さあ大変なことになった。陸路で移動はほぼ不可能なので、地元の航空会社に出向き航空便の手配である。

ブルガリア国営航空会社のバルカン航空に駆け込む。

多くの旅行者で溢れており長時間待たされた。やっと順番が来て明日のベオグラート行 47 席ないか尋ねたがけんもほろろ「NO」の一言。

夕方まで交渉を続けたが 5 時になったら窓口をびたりと閉められて交渉の余地は全くなかった。サービス精神など全くないのが社会主義国の特徴だ。

ホテルに帰り、まずは団員に事情説明し、ホテルも 1 泊延泊をお願いした。

翌朝、私は一人でユーゴスラビア航空に出かけた。

ここも旅行者で溢れている。

やっと話せる状況になったので支店長とおぼしきマネージャーと交渉を始めた。

当然答えは NO である。一席も空席はない。

午後遅くなり、マネージャーが明日早朝に臨時便が出るという朗報を伝えてくれた。果たして 47 席と言う大きな団体に席はもらえるのか。

不安であったが「Mr.Kogi OK!!」と笑顔が返ってきた。粘った甲斐があり我々グループが最優先となった。

次はチケットの問題だ。イスタンブールまでのチケットはあるがベオグラートに行くには新たに航空券を買う必要がある。

そんな多額の現金など持ち歩く事はないので、マネージャーに事情を伝えた。

するとしばらく彼は考えて「君のチケットを見せてほしい」と 47 枚のチケット眺め

ていた。

次に彼は地図を持ってきて物差しでソフィアとイスタンブールの長さを測り、更にソフィアとベオグラートの距離を測った。

そして曰く「Mr.Kogi これはだいたい同じ距離なので君のチケットを渡しなさい」と言って47枚のチケットをちぎり奥に入っていき再び現れて

「これが明日の47人分のボーディングパスです」と渡された。

夢のようだった。ユーゴスラビア航空に感謝しかないし、マネージャーの配慮に涙がでる思いでホテルに帰った。地獄に仏とはこのことだ。

そして再び郵便局から国際電話でスイス航空に連絡をした。

するとスイス航空の責任者らしきスタッフが「君たちのグループのためにチャーター便でベオグラート空港まで迎えに行くので待っていてほしい」とのこと。

翌朝は快晴。我々一行はソフィア国際空港からベオグラート空港まで機上の人となった。1時間余りでベオグラート国際空港に到着。

不安な気持ちで待合室でスイス航空を待っていた。

昼過ぎになって遠くにスイス航空の機体を見た時は安堵の気持ちでいっぱいになっ

てお互い手を取りあって大喜びしたことは言うまでもない。

スイス航空の機材はDC9で約160席の中型機であった。

早速、機内に案内された。本当に乗客は我々だけである。

飛び立ってまもなくして機内食のサービスもあり、1時間半ほどでスイスアルプスの雪山が見え、チューリッヒ国際空港に着陸した。

空港での入国手続きは簡単で、早速ホテルにチェックインした。

西側の人々の顔が明るく見え、なぜか安心感が漂っていることを強く感じた。団員も解放感に浸りながらホテルの近くのチューリッヒ湖でボートに興じていた。

国際紛争はどこにいても突然に起こることがある。

私の働いていた60年間に世界では多くの紛争、戦争、災害などが起こり残念ながら今でも止むことはない。

(別表1は60年間に起こった主な紛争・戦争・災害である)

私の仕事は海外旅行業なので常に戦争、紛争、災害などに影響を受けている。

更に為替相場の変動は会社の収益を良くも悪くも変えてしまう。

現在の円安はかつてないほど長引いてお



現在就航しているダグラス社のスイス航空；ホームページより



東ヨーロッパ圏の旅のルート
旧ユーゴスラビアからブルガリアへ

り、海外旅行の費用を押し上げていると同時に中東からの原油に依存する国々では燃料価格高騰でダブルパンチである。

反面、インバウンドと呼ばれる訪日外国人は円安で日本での旅行費用が安くなり大いに喜んでいる。

イスラエルと言う国

過去6回にわたり私はキリスト教徒たちの聖地巡礼に同行しイスラエルにある聖地を訪ね歩いた経験がある。

キリストの誕生以前から多くのユダヤ人は迫害を受け流浪の民であった。

国を持たないユダヤ人たちは19世紀末にシオニズム運動と言われるユダヤ人国家建設を目指すようになった。

1948年英国やフランスの支援によりユダヤ人の民族大移動があり約140万人が定住することになった。1948年5月に独立宣言を行い初めてユダヤ人の国が誕生したのである。(現在の人口は963万人)

第二次世界大戦ではヒトラーの民族浄化

政策の犠牲になり約600万人のユダヤ人が殺されたことは歴史に残る大虐殺として知られている。

新たに誕生したイスラエル政府の政策で大きな役割を果たしているのがキブツ(集団農場)である。

周辺は殆どが砂漠に隣接し、農業には適さない土地が多い。

ヨルダン川周辺には肥沃な土地があり、アラブ人が数多く住んでいる。

キブツはそんなアラブ人の所有地に入り込み集団で農業を始めるのである。

私もキブツの見学を何度かしたが、つい先ごろまでアラブ人の土地だった場所もあった。

当然、アラブ人との小競り合いが起こる。そこにユダヤ人を守るためにイスラエルの軍隊が出張ってくる。無力のアラブ人は土地を追われ生活に困窮する。イスラエルはかつてそんなアラブ人たちを難民として一か所に収容して管理した。その場所を訪問したが周辺は砂漠地帯で真夏は50度くらい

(別表1) 世界の紛争・戦争・事件など1966年以降

出来事	年代	備考
ベトナム戦争	1955～1975年	犠牲者数335万～343万人
オイルショック	1973年、1979年	中東戦争
アフガン戦争	1981～2001年	
湾岸戦争	1990年8月	イランのクウェート侵攻～国際紛争へ
阪神神戸大地震	1995年1月	死者6,433人
9.11世界同時多発テロ	2001年	2,977人犠牲(日本人24人)
アフガニスタン紛争	2001年10月	米国によるテロ組織攻撃
リーマンショック	2008年	リーマン・ブラザーズ破綻
SARS	2003年	世界的感染症流行
3.11東日本大震災	2011年3月	死者・行方不明2万3,332名
熊本大地震	2016年4月	死者276人
コロナ感染症	2020年1月～2022年	世界的パンデミック、交流が途絶えた
ロシア・ウクライナ侵攻	2022年2月～	継続中
イスラエルのガザ地区攻撃	2025年3月	
米国イラン攻撃	2026年2月	最高指導者死亡
イスラエルのイラン攻撃	2026年2月	レバノン攻撃・ヒズボラ壊滅作戦

になるであろう。粘土で作った急ごしらえの住居施設に最大10万人が暮らしていたと聞いた。

このような苦しい生活の中からテロ組織が生れ、ハイジャック事件を起こしたのも解るような気がした。

先進諸国のエゴに振り回されパレスチナの民は次第に追いやられていく。

国境も所有地の境界線も曖昧なので常に武力に勝るイスラエルが勝利して彼らの領土は次第に広がっていく。

ある時、我々がテルアビブ空港に到着したら、以前より日本人旅行者に入国検査が厳しくなっていると感じた。

一人ひとり別室で口頭の質問と手荷物検査が徹底的に行われた。

理由はすぐ判明した。

1972年5月30日、岡本公三が赤軍派の仲間と共謀し、テルアビブ空港で乱射事件を起こし26人もの犠牲者が出た。

彼は鹿児島大学在学中に学生運動にのめりこみ大学を放學（クビ）になっている。

この事件は世界的テロ事件として日本人にも衝撃を与えた。

その事件後間もなくして我々はイスラエルに入国したのだから厳しい取り調べも理解が出来た。

テルアビブ空港からほど近い刑務所に岡本公三たちは服役しているとガイドが説明をしてくれた。

下記はインターネットに記載されている「パレスチナ」の説明である。

パレスチナは、現在のイスラエル、ヨルダン川西岸地区、ガザ地区、ヨルダン西部の一部を含む地域を指します。古代から多くの民族や国家に支配されてきた歴史があり、古代エジプト人、カナン人、イスラエル人、ローマ人、ビザンチン帝国、イスラム帝国、オスマン帝国などがこの地を統治

しました。宗教的にはユダヤ教、キリスト教、イスラム教の聖地が存在し、イエルサレムは三大宗教の重要な都市として知られています。古代には「乳と蜜の流れる地」とも呼ばれ、交易の要衝としても栄えました。

私たちが訪れた北部イスラエルのホテルからゴラン高原が遠くに見え、夜になると砲弾の閃光が夜空に光っていたのを思い出す。

当時は国連軍（PKO）が駐留し、自衛隊も平和維持活動に加わっていた。

巡礼する聖地が戦場と隣り合わせていることに違和感を覚えながらキリストの足跡を辿ったことが戦争と平和を考える機会にもなった。

ハイジャックに遭遇

我が社も1973年11月にハイジャックに遭遇した。

我が社の主催するヨーロッパ2週間の旅はギリシャの首都アテネで終え明日は帰国の予定であった。

しかし、政治的に不安定なギリシャで当日夜クーデターが起こった。

国際空港も閉鎖と言うメッセージが届いた。

予約のKLMオランダ航空と連絡を密にとっていた。

翌早朝、航空会社から連絡が入り、今すぐ空港へきたらアムスダムから予定便が到着するかもしれないとのこと。

一行はバスで空港に向かった。外は軍隊の戦車などが配備され物々しい雰囲気の中かやっと空港に到着し、出国手続きを終え機上の人となった。

全員やれやれと安堵した。

飛び立ってしばらくして給油のためベイルート空港に着陸。

1時間ほどで再び離陸して間もなく、機

内アナウンスで「当機はハイジャックされました」と告げられた。

アラブ・ゲリラが数人バイルートで乗り込み犯行を実行したのである。

日本政府も対策本部を設置。我が社は東京のホテルの一室に対策本部を構え、情報を留守家族に伝えながら、航空会社とも連携して成り行きを見守っていた。

ハイジャック機がアフリカのトリポリに着陸した。犯人は給油を要求。

しかしリビア政府は犯人の要求を拒否した。

次々に伝わってくる良くない情報に不安な気持ちで待っていると、突然トリポリ空港を飛びたった。

燃料はわずかしかなないので次の給油地はどこなのか気になっていたが、2時間ほどで地中海のマルタ島に着陸したとの情報が入った。

マルタ空港の滑走路はジャンボ・ジェッ

トが着陸できるのに十分な距離は無かったと後で聴いた。

そこでオランダ政府と犯人との交渉が始まり、しばらくして乗客全員の開放が決まった。

しかしマルタ空港にはジャンボ・ジェット用のタラップがないため一人ひとり梯子の様なタラップで降りることになり、最後の乗客（添乗員の古木謙三）が降り立ったのは3時間ほどしてからであった。

給油の後、オランダ航空機は乗務員全員を乗せたまま飛びたっていった。

乗客解放まで48時間以上かかった。

その後、全世界の空港ではセキュリティが厳重になり、安全はほぼ完全に守られているが搭乗までに時間がかかるようになってしまった。

この世から紛争や戦争がなくなり世界の人たちが安全で自由に旅することができるよう願っています。



連日ハイジャックの記事が出た